

まちのニュース

町の様々な出来事をお伝えします。



ときめきが初参加

6月15日(日)、総合体育館前の多目的広場で第36回町民親善犬運動会が開催されました。今回から参加のときめき地区を加え、町内22の公民館分館、約2,000人の参加者が集まる大スポーツイベントとなりました。晴天のもと、グルメリレーや大玉宅急便、年代別・学童リレーに元気一杯競い合い、心地好い汗を流していました。

- 総合成績
①板井②北場③金巻
学童リレー
女子①山田②黒鳥③板井
男子①板井②木場③鳥原本村
年代別リレー
女子①板井②中学通り③山田
男子①木場②山田③板井



女子綱引き



議会も電鉄線 存続を要望

町議会は、6月定例会において新潟交通電鉄線の存続要望決議を全会一致で議決し、7月3日(木)、その決議書を新潟交通機本局、関係機関である運輸省新潟運輸局、新潟県に提出しました。当日は、議長と電鉄沿線町村の各議長が一緒に同社などを訪れ、決議書を提出し、存続要望を行いました。この電鉄線は昭和8年に開通し、ピーク時には年間670万人もの利用者がありましたが、近年は乗降客も減少傾向にあり、同社から平成10年3月廃止の方針が打ち出されていました。しかし、電鉄沿線の住民や町民にとっては、通学或いは日常の大切な足として利用されており、廃止によって生活に重大な支障を来すと考えられています。今回の存続要望決議は、地域住民の要望に応える形で提出されたものです。

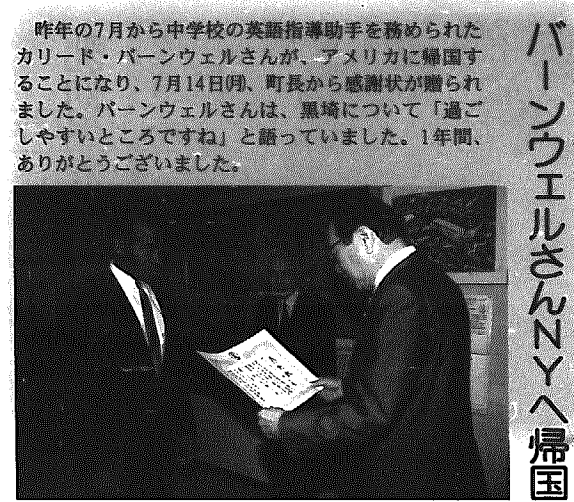


電鉄の今昔 第2回

いつまでモボの時代ではない、西蒲にも鉄道を

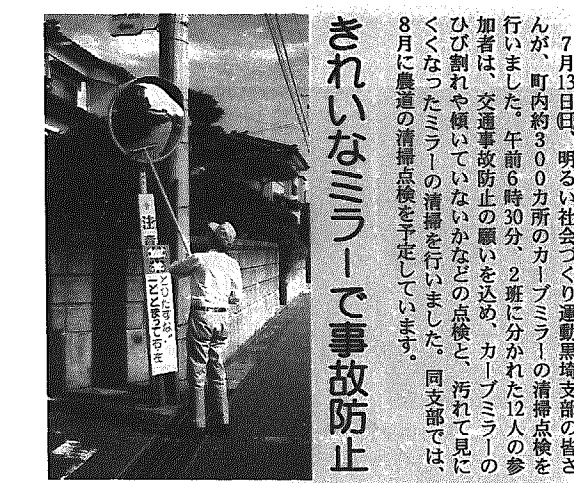
(先月号からの続き)
「でんしゃ」それはなんとなく親しみのある言葉である。特に筆者ら世代にとって小さいころから走り始めた「でんしゃ」は、新潟の川開き(川祭り)やお盆に白根への新潟まつりや、ややお盆に白根への墓まいりや大仏合戦を見に親たちに連れられて行った等、なつかしい思い出が残っている。
今から十五年前、一九八二年の「広報くろさき」二月号に、町の名譽町民、板井の岡田幸平さんが、まだ八十五歳でお元気な時に取材した電車の特集記事が載っている。岡田さんといえば、昔から新潟交通の大株主として有名であり、新潟電鉄とは深い関わりのある人と認識していたが、電車開通の発起人であられたということは今初めて知った。以下は、中ノ口電気鉄道株式会社を創立し、中ノ口川沿線に軌道車(電車)を走らせ、郷土西蒲原の発展に大きく貢献された岡田さんの、電車開通までの苦労話から、戦中戦後の最盛期には文字通り人々の足であった電車が、やがてマイカー等の出現によって

斜陽の途をたどり、今日に至るまで、岡田さんからの取材記事をもとに、他に当時の新潟新聞や、町の古老からの聞き取りを交え、電車の記録としてまとめてみる。
岡田「大正時代に今の越後線(當時は私鉄)が開通すると、何時までも船の時代ではないので、西蒲原にも鉄道が欲しいと思っていました。その矢先、県の土木部から話があつて鉄道を通すことになった。新潟県でもっと早く開通した鉄道は、明治十九年の直江津-関山線、大正に入つて頸城線、越後線、蒲原鉄道が次々と営業を開始した。そして中ノ口電気鉄道株式会社(資本金百五十万円、従業員十四人)が設立されたのが昭和四年。鉄道工事を昭和七年に始めて、社名も「新潟電鉄株式会社」と変更。昭和八年四月一日から電車事業の開始となった。最初の計画では電車は中ノ口川の堤防の上に通すつもりだった。堤防上に線路を敷けば建設費が安上がりになるということだったが、それは国の認可が得られず堤防下になった。堤防下は用地買収の必要がないので敷設費



バーンウェルさんN.Yへ帰国

昨年7月から中学校の英語指導助手を務められたカリド・バーンウェルさんが、アメリカに帰国することになり、7月14日(月)、町長から感謝状が贈られました。バーンウェルさんは、黒崎について「過ごしやすいいところですね」と語っていました。1年間、ありがとうございました。



きれいなミラーで事故防止

7月13日(日)、明るい社会づくり運動黒崎支部の皆さんが、町内約300カ所のカーブミラーの清掃点検を行いました。午前6時30分、2班に分かれた12人の参加者は、交通事故防止の願いを込め、カーブミラーのひび割れや傾いていないかなど点検と、汚れて見にくくなったミラーの清掃を行いました。同支部では、8月に農道の清掃点検を予定しています。



正しい食習慣で、病気に対処

6月25日(水)、保健センターで子育てについての講演会が行われました。これは、新潟大学医学部小児科の橋本尚士先生が、生活習慣病をスライドを使って説明したもので、幼児期における悪い食習慣は直らないこと、肥満は万病のもとなどを事例を交えながら講演しました。

開発途上国の人づくりに



平成9年度の青年海外協力隊員398名の一人に結立の阿部聡さん(31)が選ばれ、技術・技能を生かした開発途上国の国づくり・人づくりに協力することになりました。阿部さんは、10年間勤めた職種の自動車整備士として7月8日、スリ・ランカに派遣されるのに先立ち、7月4日(金)に町長を去来訪問しました。阿部さんの「やりがいのある仕事なので、帰国の際には、小、中学校でおみやげ話でもしてください」と激励しました。



は安かったが、代わりにこんな曲がりくねった線路になった。」
鉄道線路を敷くため堤防から住居移転をさせられた佐々木臣也さん(板井四番組)の話
「中ノ口川沿線に鉄道を通した」という声は前からあつた。昭和三、四年ごろ、県内に秋田県出身の土木部長で奥山亀蔵という人がいた。この人が、鉄道(後の国鉄)から見離されて、県内でもっとも交通環境の悪い中ノ口川沿線に電車を走らせる計画をたてた。
これに同調した当時の岡田幸平さんや、その盟友味方村吉江の現高橋和基知さんの祖父高橋吉蔵さん(共に新潟交通の大株主)らが、強力に県土木の電車線路敷設の計画に協力した。
このころ板井の中ノ口川堤防の上には蒸気場(蒸気船のキップ売場、現高橋板金)を含む四軒の茶屋があり、佐々木さんの家は新茶屋といつてそのうちの軒だった。佐々木さんたちは堤防の上なので、国から借地の形で家を建てていたが、昭和三、四年ころから

堤防の下に移転するように、県の土木部から勧告を受けた。移転の理由の中ノ口川堤防の上に鉄道の線路を敷くためということだった。昭和七年、佐々木さんたち三軒の茶屋の人たちは、ほんの僅かな補償で現在地に移転した。
注 佐々木さんから聞いた奥山亀蔵さんを、新潟電鉄の沿革史で調べたら、昭和四年六月二十日中ノ口電気鉄道株式会社を設立。(本店新潟市上大川前通り五番町、資本金百五十万円、社長空席、専務取締役奥山亀蔵と明記されている。
昭和三、四年ころから、県の土木部の電車軌道敷設計画のため、堤防の上から住居移転の話があつたことや、当時の土木部長が奥山亀蔵氏という人で、この人が間もなく県を辞めて新潟電鉄のおやかたになられたという佐々木さんの話とまったく符合しており、その記憶のよさに感心した。また、移転の理由も、岡田さんの「最初は電車を堤防の上に通す計画だった」ということにも裏付けられる。
・越後大野駅のエピソード
電鉄では、大野町の駅を越後大野駅の名で、ほぼ町の真ん中にある、今の黒崎中学校前駅(昭和五十七年開設)あたりにする計画だったが、地権者や町の一部の人たちの猛反対に遇って、新田町のはずれの今の場所になったのだという。この時、電車沿線の人たちの中に、「電車なんか何のたしになる」なんて声が多く、板井の岡田さんの家へ何十人も人が押しつけて大変だったということである。(続く)